同志社のDNA

神谷 雄績	同志社大学キャリアセンター所長
講師紹介〔〔かみや・たけのり〕	

新島先生に導かれて

神谷と申します。職員として同志社にお世話になって四十年になります。「キャリアセンター」という、学生諸君の就職、あるいは学生諸君に人生と職業とをどう共鳴させながら生きていくかを考えてもらうようにお世話をする、そういう組織で働いています。

今日は「同志社スピリット・ウィーク」でお話をさせていただくという、またとない機会を与えてくださったことに感謝します。わたしは学者ではありませんから、高邁なことや、くわしい歴史などについては語る資格がありません。従って、具体的なことを、つまり体験をお話しします。

まあ学内では、同志社あるいは新島先生について語られる機会が多いわけですけれど、新島襄を引用すれば、あるいは賛美すれば同志社人ということになるのか、ということはもう少し問われていいことだと思います。最近は、昔の同志社人のように、新島先生とご自分の出会いを熱く語るようなことは少なくなりましたね。つまり、新島先生がどうおっしゃったとか、どのような行動をおとりになったかという話はされるのですが、話し手と新島先生との、人間としてのぶつかり合いがどの辺にあるのか、よくわからないきらいがありますね。その人が、どのような時に、新島先生の生きざまや言葉のどこに支えられたのか、あるいはどう触発されて、自分がどう変わらざるをえなかったのか、実はそこが知りたいわけなんですが、そこが語られないので、ちょっぴり残念な気がします。

そうは言っても、今の同志社人の中にも、新島先生を彷彿とさせるような生き方をされておられる先生方を、私は何人か思い浮かべることができます。まあ、新島先生はご自分の思いを声高に叫ぶような人ではありませんでしたよね。だから福沢諭吉とか大隈重信などに比べて、表面的な強さは感じられません。どちらかと言うと、パスカルの「考える葦」のような、国とか人間のことを深く考え続けた人のように見えます。しかし先生の行動や、書いたものを読むと、新島先生が信念の人、情熱の人であったことがわかります。ただし、新島先生も人間ですから、いろいろ葛藤もあったはずで、それをあまり神格化しすぎると、先生を見誤るかも知れませんね。

そういう新島先生に、私は折に触れて、導いていただきました。その度に先生との出会いがありました。もちろん、間違って先生を理解したり、あるいは自分勝手な解釈をしたりしたことも多いと思います。今日は、その一端をお話ししてみようと思います。

同志社の体内に流れる「自由」のDNA

権力側から語られる歴史と、名もなき庶民から語られる歴史とがあるとすれば、これからお話しすることは、もちろん、名もなき側の歴史であります。特に最初にお話しする出来事などは、かかわった者四人の中で、今、同志社に残っているのは私一人であります。その私も、あと二年足らずで定年をむかえます。もちろんすでに風化している出来事ですし、確実に忘れ去られるであろう出来事ですけれど、この機会にお話ししておかなければと思います。学生諸君には、新島先生や同志社とそんな関わりをもちながら、四十年ほどを生きてきた人間がいたことを、何かの折に思い出していただければと思います。

私は、四十年勤めたということで、人生の大部分の重要なものを同志社大学によって授かってきました。ですから当然、現在の方が若い時より、同志社大学に強い愛着と、同時に感謝の念を持っています。

どんなところが好きなのかと言うと、いろいろあるんですけれど、一言でいうと、平凡な言葉ですが、やっぱり自由なところでしょうね。自由というのは、むずかしい、へたをすると、つまりそれを守るという強い意思とか、「何からの」自由かという方向性を欠くと、あるいは自分の属している共同体の中での関係性を考えていないと、いい加減なものになってしまう、つまり危ういところがある概念ですけれど、しかしわたしの感じでは、同志社の特長はやはり「自由」だと思います。

その「自由」ということとどこかでつながっているんでしょうけれど、同志社というところは、ずいぶん懐の深いところがあると私自身は思っています。と言うのは、私は同志社出身ではないし、ものをズケズケ言いすぎるし、自分が正しいと考えることを押し通そうとする、一匹狼的な、自分でもイヤになるような性格のところがあります。そのため、かなり人と衝突してきました。そのような人間でも、受け入れてくれて、そして活用してもらったという実感を私はもっています。それは確実に、同志社のDNA、同志社の体内に流れているものによってではないかと思っています。

皆さんよくご存知のように、新島先生は十か条の遺言を残されました。先生は数え年四十八歳、志半ばで亡くなっておられますね。もう少し長生きしてくださっていたら、同志社の今日はもう少し違ったものになっていたんじゃないかと思ったりします。

尾崎士郎の『人生劇場』の中に、早稲田に学園紛争がもちあがった時に、学生が門前で、「諸君よ、新島先生亡き後の同志社の末路を知るか」というような演説をしているところが出てきます。おそらく尾崎士郎は学生時代にそういう演説を聞いたのでしょうね。あるいは案外、彼自身がそう演説したのかもしれない。彼は学生運動のリーダーでしたからね。どちらにしても早稲田からみると、新島先生が亡くなって以後、同志社は落ち目になっていると見えたのでしょうね。何と言っても、浮田和民や大西祝、あるいは安部磯雄など、早稲田の黎明期を支えた大物は同志社出身でしたから、早稲田から見ても、同志社は立派な学校だという印象はあったでしょう。大隈候も時々、同志社を訪れてくれています。大隈候の自伝には、「同志社は親類のようだ」とありますね。

新島先生の「叫び」である遺言

そこで新島先生の遺言の話ですが、遺言というのは「今際（最期）の言葉」、死後に言い残す言葉です。従って、この十か条は新島先生の願い、まさに「叫び」だと言っていいでしょう。当然、十か条すべてが同志社にとっては極めて重いものです。われわれ同志社人にとって、「神の声」と言いかえてもいい。しかしあえて教職員にとって特に重要なのはどれだと言われると、わたしは次の四か条だと思います。つまり、

一、同志社教育の目的は、其神学、政治、文学、科学等に従事するに拘らず、皆精神活力あり、真誠の自由を愛し、以て邦家に尽す可き人物を養成するを務む可き事。

一、社員たるものは生徒を鄭重に取扱う可き事。

一、同志社に於ては倜儻不羈なる書生を圧束せず、務めて其本性に従い、之を順導し以て天下の人物を養成す可き事。

一、同志社は隆なるに従い機械的に流るるの恐れあり、切にこれを戒慎す可き事。

この四か条です。

わたしはこの四か条を思い出すたびに、「神谷さん（先生は人を呼ぶ時に、「さん」づけで呼んだんですね。学内の雑用係りのおじさんにも、学生はこの方を「五平」なんて呼び捨てにしていたのですが、先生は「五平さん」と呼んだことは有名です。だからわたしにも神谷君とは言われないはずです。慶應大学はだいたい歴史的に「君」づけらしいですね）、あなたは職員としての本分を果たしてくれていますか」と、新島先生から問いかけられているような気がしてしかたがないのです。

わたしにとって、この四か条は戒律とでも言うべき言葉ですが、その中でも、特にわたしが同志社にお世話になって最初に心を打たれたのは、「倜儻不羈の書生を圧束せず、務めてその本性に従い、之を順導し以って天下の人物を養成すべきこと」という遺言です。「倜儻」というのは、「独立していて他から拘束されないこと」です。「不羈」も「束縛されない」あるいは、「おさえつけにくいこと」です。明治時代の書物にはよく出てきますね。福沢諭吉の書いたものなどにも出てきますけれど、確か、板垣退助の書いたものを読んでいる時にもあったような気がします（まあこれは自信がありませんが）。明治時代という、新しい時代を切り開いていくためには、こういう気概が期待されたのでしょうね。

ですから「倜儻不羈」というのは、まあ手綱のついていない暴れ馬のような感じの人物、あるいは「規格外の人物」と言いますかね。わたしもこの言葉が好きで、自分も「倜儻不羈」でありたいと思いました。特に若い時はその思いが強かったですね。それゆえに、他の人びととの衝突も絶えなかったのですが、それでもそれを呑みこんでくれたのが同志社だと思います。それは、同志社独特の気風だと思います。おそらく他の大学ではもちろん、企業ではなおさら、わたしのような行状の人間を幹部にしてくれるところはないと思います。

大学紛争の時代の出来事

そういう遺言の精神が同志社で息づいていることを実感したのは、三十歳くらいの時でした。宗教部という、今のキリスト教文化センターの前身で仕事をしていた時です。まあ今のキリスト教文化センターのようにマイルドではない、極めてラディカルな時代です。大学紛争もありましたしね。そこにいた時に、『宗教部報』（宗教部が出している新聞、部の機関

紙ですね）が、授業料値上げに対する当時の学長のやり方を批判しました。つまり、学生に対する学長としての説明責任の欠如を問題にしたわけです。新島先生の教えは「学生を大事に取り扱え」ということですから。

当然、学長は激昂されました。その結果、われわれの上司である宗教部長が解任され、新しい宗教部長が就任することになった。そこでわれわれは（「われわれ」というのは、宗教主事三人と私の四人です）、その新部長予定者を説得して就任を辞退してもらいました。ということで結局、宗教部長になり手がないので、学長自身が宗教部長を兼任されることになったのです。われわれは宗教部長解任自体が承服できないわけでして、学長の一連の行為は、批判精神の圧殺、言論の自由の侵害、あるいは強権発動だと受け取ったのです。そこで一年間、抵抗運動をやりました。学長の宗教部長兼務を認めないということですから、宗教部の運営費用も自分たちで出し合って活動を続けるという異常事態を選択したわけです。

その時の宗教主事三人も尊敬すべき「倜儻不羈」なる牧師たちで、「告発はあるが、祈りがない」などと学内でレッテルを貼られたくらい、極めてラディカルな先生ばかりでした。そんなことで、「正義はわれらにあり。権力何するものぞ」と意気軒昂でしたね。もちろん、皆クビ覚悟です。

しかしわたしは職員ですから、学長に抵抗するなどということは、職務上、許されません。宗教主事はクビになっても、牧師ですから、なんとか食っていけます。ところがわたしは一介の職員です。クビになると妻子を抱えて路頭に迷うことになる。だから主事の先生方からも「オッチョコチョイなことはやめておけ」と、闘争から退くように諭されたりするんですけれど、こちらは「見損なってもらっちゃ困る」というわけです。職員の最高責任者である総務部長からも、「キミの振る舞いは、職員としては許されるものではない」と怒鳴られたりするわけです。しかし正しいと思うと引けないタチです。

新島先生なら、このような時にどうしただろうかと、先生についての書物をむさぼるように読みましたね。ところが先生は、死刑覚悟で日本を脱出した人です。私も、これしきのことに負けてたまるかと思ってしまうわけです。なにしろ若いし、血気にはやっていましたから。この歳になって考えると、新島伝を浅読みしたなとか、ちょっと大人気ないところがあったなとかと、大いに反省するところはありますけれども、その時は「窮鼠猫をかむ」っていうやつです。何も失うものはないと覚悟をきめた人間というのは、権力なんて怖くもなんともないような心境になるもんなんです。

しかし「失う物は何もない」と覚悟を決めたとは言え、一年間、学長という権力者にたった四人で楯突くのは、口で言うほど生易しくはありませんでした。こちらには権力に対抗できるようなものは何もないわけですから。あえて言えば、「正義」しか頼るべきものがない。ところが大学というところはおもしろいところで、つまり真理を探究するところですから、案外、「正義」は力になりえるのです。

わたしは新聞記者の友人がたくさんいましたので、彼らを味方につけて、学内だけではなく学外にも正義を訴えました。持てる手段はすべて使うしかなかった。これが掲載紙（掲載紙を見せる）の数々、あるいはわれわれが書いた檄文の記録です。同志社の内部問題が商業新聞にこれだけ立て続けに出たことはなかったでしょうね。それで結果的には、われわれの主張が認められるような格好になって、学長は一年後の選挙に敗れて退くことになるのですが、そこで同志社の「すごさ」を実感することになるのです。

つまりたった四人の反乱を大勢の教職員が一応、理解してくれた（本当のところはそうでないかも知れないんですけれど。つまり結果として、学内の権力争いに加担してしまった側面も否定できないと思っていますけれど）。まあたった四人の抵抗を大きなうねりに変えたということはもちろん、同志社らしいすごいことなんですけれど、別の面でわたし自身が個人的に受けた経験も、衝撃的でありました。

「ノーサイド」の意味するもの

選挙が終わってもできることなら、わたしとしては学長や総務部長には学内で顔を合わせたくないんですね。若いですし、悪いのはあちらだと思っていることもあります。こちらからへり下がって挨拶をするなんてことは誇りが許さない。ましてや、一年間の非礼を詫びることなどイヤなんです。ところが狭いキャンパスですからどうしても会ってしまいます。

ある時、向こうから学長が歩いてこられました。そうと気がついた時にはもう避けることができない距離まで近づいていました。仕方なく、わたしは無言で学長の横を通りすぎようとしたんです。おそらくわたしの方は、敵対心丸だしで、顔の表情も引きつっていたでしょうね。突然、「神谷君、なんでそんなむずかしい顔をしとるのや」と学長がわたしを呼び止められたんです。そして、「お互いにノーサイドやないか」とおっしゃったんです。

普通ならクビになる可能性だってあっただろうし、実際、わたしもクビを覚悟で闘ったんです。クビにならないまでも、少なくとも懲罰くらいは科されるかもしれないと思っていた。何たってこちらは全力で学長を傷つけたんですからね。その上相手は、学長選挙に破れたとはいえ三カ月ほどは、まだ実権を握っているわけですから。ところが、「ノーサイドや」とおっしゃるんです、三十の若造に。

その出来事は、わたしの経験と理解をこえていました。実際、それはわたしにはショックといっていい事件で、何日も「あれはどういうことなんだろう」と考えました。

「ノーサイド」という言葉は、皆さんご存知ですよね。フットボールの試合で審判が「試合終わり」という時に使いますね。ラグビーは特に「ノーサイド」の精神を大事にします。死力を尽して戦った後は、敵も味方もないということです。わたしはその言葉がラグビーで使われるというのは、その時は知らなかった。ラグビーには何の興味もなかったんです。同志社に入ると、ラグビーに関心のないものは同志社の人間じゃない、みたいな雰囲気のようなものがあることを感じて、ちょっと反感すら覚えていたくらいでしたから。

で、その元学長とはその後も、キャンパスで何度もお会いするわけです。そのたびに、声をかけてくださる。「勉強しとるか」とかですね。そうすると、だんだん「ノーサイド」の意味がわかってくるのです。そしてその、相当憎んでいたはずの元学長を、「わりとええ人やなあ」とかと思うようになるわけです。まあ、惚れっぽいタチなんですね。それはやがて「立派な人やなあ」に変わっていった。時には元学長の中に新島先生が生きているではないかと思えたりすることもありましたね。そうすると、知らない間に元学長をどこかで尊敬している自分があった。ある時、「先生、その節の非礼をお許しください」という謝罪の言葉が、本当に素直に出ていましたね。

ところがわたしを受け入れてくれたのは、学長だけではないんですね。われわれ四人の抵抗に批判的だった教員や職員が、やがてわたしを受け入れてくれた。何かしら同志社という大学の身体全体に、そういう寛容な血液が流れているんですね。

倜儻不羈なる学生を大事にせよ

それは、ある面から言えば、そんな人間を一刀両断に切り捨てることのできない「弱さ」だと考えることもできるかもしれない。しかしわたしは、それはやはり大した寛容さだと思いますね。新島先生は問題を起こした学生を叱りつけずに、杖でご自分の手を鞭打ったわけです。それは新島先生に学生を叱りつける胆力がなかったのだと言う人もいます。しかし私はそうは思わない。あの鎖国の時代に、打ち首覚悟で密出国した先生が胆力に欠けるはずがありません。

また、気宇の小さな人間が、学生の前でそのような弱みとも思える行動をとれるとも考えづらい。先生の中に相当深い思いがあって、そのような行動が生まれた。私はそう思うわけです。だからわたしも、その血液を受け継ぎたいと思うようになりました。特に先の四か条の遺言です。たとえば「倜儻不羈」の学生を大事にせよ、という新島先生のお言葉をどう実践するか、わたし自身が受けたこの恩恵を学生にどう伝えたらいいか、それが私自身の課題になりました。

その当時、「倜儻不羈なる」学生と言えば、それは、大学と常に先鋭に対立していた学寮の学生と、学友会の学生たちです。七十年代前半と言うと、本学ではまだ大学紛争の余韻が色濃く残っていました。紛争に関わる学生は極めて厳しく大学と対峙していましたから、わたしはそれらの学生と直接関わる仕事、ほかの職員が最もいやがる仕事を志願して、職員生活の約半分をそういう業務に費やすことになるわけです。

まあ大変な時代で、ヘルメットをかぶり、竹槍をもって、学生が毎日のように学生課や厚生課にやってきては、ガラスは割るし、今、明徳館の一階の部屋が金網入りガラスになっているのはその時の名残です。私は金網入りガラスに猛反対した人間ですが、というのは、そんな学生だってウチの学生です。恐がっているわけにはいきません。しかし現実は、学生たちは集団で毎日のように教室に乱入して、先生方に議論をふっかけては授業妨害をすることなど日常茶飯事でしたね。彼らはそれを「糾弾」と言ったんですけどね。

入学式の学生代表の挨拶も、今のようにバランスのとれたものではなく、壇上の総長や学長を「住谷」とか「松山」とかと呼び捨てで批判するのが普通でした。今の学生諸君はそんなことは信じられないでしょうけれど、それが本学の「とんがった」学生のスタイルだった。精一杯、反権力の姿勢を示そうとしたんでしょうね。まあ、ものすごく自己主張を持っていたことは事実です。つまり「倜儻不羈」の人間たろうとしていたのです。ですから、わたしも徹夜で彼らと議論することはしょっちゅうでした。寮生の公開質問状に対する学生部長の回答書を単身で寮に持っていくなんてことは、大変に恐ろしいことなんですが、誰もやる者がいない以上、私が行くことになる。実際、一人きりで寮に閉じ込められ、何時間も百人近い寮生から集中砲火をあびて、まともに外に出られるのかというようなことも珍しくなかったですね。

学生の訴えは、無理難題や難癖の類もありましたが、極めて真摯なものが多かった。特に大学教育の本質をついたものが多かったですね。むしろ大学がその圧倒的な学生のエネルギーや正当性を受け止められなかったような気がします。ところが今日のように、学友会などの自治組織も消滅し、物事の根源を問いかけようとする力が学生からなくなると、大学から深みがなくなって、わたしには、逆に大学にとって悪い兆候のような気がしています。

わたしはそういう先鋭な学生と、とことん議論しました。学生の主張を正しいと信じ、大学執行部を説得したこともありますし、一人の生活者として彼らと対立して、激しい議論を交わしたことも数え切れないほどありました。その結果、逆に強い信頼関係が生まれました。喧嘩した学生が卒業して結婚式に呼んでくれたり、「息子が大学生になりました」といった手紙をくれたりすると、今でも電話してくるのが三人ほどいますけれど、「彼らと真剣勝負をしてよかった」と職員冥利につきるというか、「倜儻不羈」なる学生を大事にしてよかったと思います。さらにうれしいことは、彼らが社会に出て、立派な仕事をしていることです。

「職員冥利につきる」と言いましたが、ちょっと自慢めいて恐縮ですが、最近の、二年ほど前の「卒業アルバム」にわたしのことが書いてありました。「同志社語録大全」というページで、卒業していく学生が、その年に多く使った印象的な言葉、「同志社語」とでもいうべきものを三十項目ほど選んで、解説をつけています。「シンタナ」というのは新田辺のことであるとか、「ナイバー」というのは法人内高校出身者であるとかなんですけれど、その中に「ヒゲ部長」という項目があります。「ヒゲがトレードマークの神谷雄績就職部長の通称。就職活動でお世話になった人も少なくないはず。就職活動に際しての心構えや色々な役立つ情報を親切に教示して下さる」という解説がついています。教職員でこういうところに選ばれるのは珍しいし、それこそ「職員冥利につきる」ことです。

まあわたしは学生諸君のエントリーシートを毎年大量に読んで、たくさんの学生諸君と議論しますし、相談はいつでもＯＫにしていますから、こういうことになったのでしょう。ただし、キャリアセンターの職員は全員、「学生諸君を鄭重に取扱う」ことを仕事に対する共通認識にしていますから、キャリアセンター全体を代表して、わたしが選ばれたということだと思います。他にも学生に親切な職員はまだいるはずですけどね。しかし最近、こういうことがあまり学内では評価されないのは残念なことです。学生のことなど考えないで「機械的」に、人事異動が行われたりしますしね。新島先生が「機械的になるな」とか、「生徒を鄭重に取扱う可き事」と遺言したことは、どうも風化しつつあるのでしょうかね。

反権力、自由主義

話を元に戻しますけれど、同志社には、歴史的に、反権力を許容するようなところがありますね。山川均、山本宣治、安部磯雄、あるいは最近では土井多賀子など同志社出身者の系譜をたどると、そういう雰囲気があります。反権力と言うと語弊があるとすれば、やっぱり「倜儻不羈」を大事にするところと言えばいいでしょうか。同志社の初期に、熊本から非常に先鋭な学生集団が編入してきて、彼らは高い理想を掲げて新島先生に対してもかなり失礼なことを言ったりしているんですけれど、先生はそういう学生をしっかりと受け止められた。それらの学生、「熊本バンド」と呼ばれているんですが、彼らが同志社のその後の歴史を作るわけですね。

しかし新島先生も相当、反権力というか、権威に束縛されるのがイヤな人だったようですね。と言っても、先生が権力に鈍感な人だったかと言うと、相当に敏感な人だったように思えます。それはたぶん、先生がどちらかと言うと下級武士の子として育ってきたことと無関係ではないと、私には思えます。しかし私は新島先生の特徴の重要な面として、これは信仰と関係があるのかも知れませんが、死ぬまでご自分が自覚的に権力の側に身をおくことを避けてきた人だということを挙げなければならないと思っています。

信仰と関係あるかも知れないと言いましたが、子どものころから、その萌芽はあるんですね。たとえば先生が子どもの時に、お母さんから、家臣の中で身分の高い人には特に丁寧に頭をさげるように何度も諭されたことがMy younger daysに出てきます。先生は特に身分の高い人間だからといってお世辞を言ったり、頭を下げたりするのはイヤなんですね。おチビさんのころから、反権力なんです。こんなところが、同志社の「自由」の源かも知れません。

頭を下げるのが嫌いなのは、明治新政府の岩倉使節団がアメリカに教育調査にきた時も、ほかの日本からの留学生がうやうやしく政府のエライさんに頭を下げる中で、先生だけが頭を下げるのが嫌いですから、いや、神様の下では人間は皆平等だと信じている人ですから、胸をはって握手をするんですね。それから、ずっと後になって、あれは四十一歳の時だったと思いますが、先生がヨーロッパを再び訪れた時に、ローマ法皇に会えるチャンスがあったのですが、うやうやしく跪かなければならないことが分かって、やめてしまったという話があるのですが、本当であれば、いかにも先生らしい話です。

反権力ということでは、先生は二十一歳、つまり皆さんと同じくらいの歳に、命をかけて日本を脱出し、十年間アメリカで学ぶわけですが、七年目の一八七一年に明治新政府の外交官である森有礼とボストンで会見しています。この時、森は、日本という新しい国を建設するには、この新島襄という人物の力が必要だと直感しますから、何とか先生を国に引っぱり込もうと考えるわけです。そこで彼は、先生の密航の罪を免除する上に、これまでアメリカでかかった費用を国が弁償しようとハーディー夫妻に申し出ています。ハーディー夫妻というのは、先生を実の子どものように面倒をみてくれた、まさにアメリカでの「父母」です。ところが先生は、その金を絶対に受け取ってくださるなと涙ながらに訴えています。その理由が、その金を取ることによって、自分は日本政府によって拘束される、というのです。自分は権力ではなく、イエス・キリストだけのしもべでありたいというんですね。

日本に帰ってからも、田中不二麿（この人は、岩倉遣外使節の理事官で、欧米の教育事情視察報告書を新島先生がまとめられたことで、先生の実力を最もよく知っている政府高官ですが）という文部省の最高責任者が京都まで来て、政府に入ってほしいと懇願するんですけれど、権力に繋がれるのはイヤだと断りつづけて、「キミはヤソの奴隷だ」と田中を怒らせたというのも、自由主義者としての先生の面目躍如といったところでしょうね。

だって政府に入れば、権力も地位も最高のものが手に入るでしょうし、多くの人はそれだけの待遇を示されれば心は動くでしょう。今でも、代議士などという人参をぶら下げられると、ホイホイと権力の手先になるような有名人がたくさんいるでしょう。そういうようにならないのが、いかにも新島先生だと思います。そこが、反権力、自由主義といった同志社のDNAの素だと思います。

ラグビー部の伝統の中にある同志社DNA

わたしがラグビーに反感を持っていたことは先ほど言いました。しかし恥ずかしながら、それから五年後には逆にラグビーの虜になっていましてね。そしてラグビーを通して、同志社の体内に流れる伝統というものを、今度は学生から教えてもらうことになるのです。

先ほど言いましたように、わたしは学生部に長く関わりましたので、上司としての学生部長が全部で四人おられます。そのお一人が岡仁詩という、同志社ラグビーの象徴ともいうべき先生でした。偶然、今日、朝の講演者の一人がその岡先生でした。不思議なご縁です。

岡先生の学生部長時代は、特に学寮問題が大変でした。学生に明徳館や有終館などの学内の建物が封鎖され、授業が満足にできないようなことが何度もありました。それでわたしは、そういうことに大学としてどう対処するか、方針を相談するために学生部長の岡先生に会いに行くわけです。先生は大体、岩倉のグランドにおられるんですね。今の同志社高校のグランドで、当時はあそこが大学のラグビーグランドだった。極めて厳しい決断を迫られるような相談をするわけですが、先生は「そうですねえ」なんてラグビーの練習から目をそらさないで仰るわけです。

林敏之君とか、この春まで日本代表の監督であった萩本君とか、大八木敦君とか、元日本代表監督で今は神戸製鋼ラグビー部のゼネラルマネージャーの平尾誠二君とか、サントリー監督だった土田君とか、錚々たるメンバーがいました。ですから時々は、「先生、あれが今度入ってきた平尾君ですか」とかという話になるわけですね。あるいは、「なんでラグビーはボールを前に放ってはいけないんですか」とかお聞きするわけです。そうすると先生が極めて明快に教えてくださる。

この岡先生という人は、私は案外、新島先生とどこかで重なるようなところを感じる時があるのですが、どちらかと言うと、明確に指示を出す指導者ではなく、あれもあるなあ、これもあるなあ、と考えられる。理想とか夢をいっぱい持っておられる。その理想のために、現実の決断に迷いがあることもある。新島先生の軌跡を辿ると、ああ先生はここでは随分悩まれたんじゃないかとか、決断を迷われたのではないかとかと、考えさせられることがいくつもあります。岡先生もそんなところがあって、そこが、人間として深い味わいがあるんですね。要するに、根っからの教育者なんです。

ところが、ラグビーの話は実に明快で、そして夢があって、それ以上に自由な、「倜儻不羈な選手を圧束しない」チームを目指しておられましたね。それで先生に教えられることが多く、いっぺんにラグビーが好きになりました。ということで、それから国立競技場まで応援に行くことが毎年の恒例になりました。

で、大学選手権三連覇のかかった決勝戦です。三連覇というのは同志社大学がなしとげた前人未到の大記録です。いまだに破られていない。それがかかった試合で、相手は関東を制した慶應大学です。わたしは例によって、超満員の国立競技場で観戦していました。

大方の予想通り、すでに二年連続日本一の「無敵同志社」が平尾君の活躍で前半をリード。まあ、負けるはずがないと、安心しきっていました。ところが後半になるガラッと戦況が逆転します。どうしたことか、スクラムが慶應に圧倒されるようになって、マイボールさえも相手に取られてしまうありさまで、こちらは防戦一方です。そしてついに逆転トライを奪われることになった。

えらいことです。しかしこの「トライ」は幸い、「スローフォワード」と判定されて点にはならなかった。しかし依然としてスクラムは押しまくられるわけです。同志社ファンは悲鳴の連続で、わたしも正直なところ、逆転されるのは時間の問題だと思いましたね。ところが、そこで奇跡のようなことが起こったのです。

スクラムというのは、ラグビーに関心のない方はご存知ないかもしれませんが、双方八人どうしの選手が固まりになって押し合って、中央に投げ入れたボールを奪い合うのですが、八人の結束と、特に最前列の三人の強さや技術が重要になる。一番と三番をプロップ。真中の二番をフッカーと言います。プロップは文字通り「大黒柱」「支柱」です。味方の一番と相手の三番、味方の三番と相手の一番が肩を組んで押し合う形になるのですが、特にどのチームも三番に最強の選手を持ってくる。この時の慶應の三番は極めて強力で、こちらの一番が押し負ける結果、全体が押されてボールをとられてしまうという形勢です。同志社の一番は四年生の馬場君、二番は二年生の森川君でした。

同志社ゴールライン目前のスクラム、同志社ファンの悲鳴と慶應ファンの歓声が入り乱れる中で突然、二年生の森川君が四年生の馬場君に向って、「馬場かわれ」と言ったんです。二年生が四年生に向って絶体絶命の場でそんなことが言えるというのは、同志社以外の大学、特に上下の序列を重んじる体育会では考えられないことであります。大変な出来事です。おまけに呼び捨てです。

なんで呼び捨てかと選手に尋ねたことがあります。そうすると、いったん試合が始まると十五人の選手は同等であるというのが、本学ラグビー部の伝統らしいですね。「馬場さん」と言うように「さん」をいちいちつけていたら状況に即応できないからだとも言っていましたね。要するに、試合が始まれば、選手はみな同格であるという考えです。これも実に、新

島先生のDNAですな。他大学では試合中でも「さん」づけで声をかけていますから、やはりこういう考えは独特なんでしょうね。本学ラグビー部の伝統と言えば、風呂に入るのも練習が終わった者から入りますから、結果として一年生から入ることが多い。キャプテンを選ぶのも選手の選挙です。どれも、大学の体育会としては特異です。

新島先生が残された種

ここでわたしが連想するのは、命がけで日本を脱出した新島先生が最初に面食らったであろうアメリカの船中での人間関係です。先生は、日本の国を強くしたい、そのためには西洋の進んだ科学を学びたいという一心で、函館から日本を脱出するのですが、船の中の人間関係には特に驚いたのではないかと、わたしは想像します。

たとえば日本では、特に新島先生は侍でしたから、誰かほかの人を呼ぶ時は、「殿」とか「御主」とか「貴殿」とか「あなた様」とか、「お前」とか「おい」もあったかもしれない。要するに身分とか上下のありようによって、つまり自分と相手の関係によっていろいろ呼び方を変えただろうと思うんです。日本では、いわんや封建社会では人間関係は縦関係ですよね。ところがアメリカの船の中では、仕事中、船長は「キャプテン」と呼ばれるでしょうけれど、仕事を離れると、ほとんど「ユー」でしょうね。年上であろうと、目上であろうと皆、「ユー」で、平等です。先生はびっくりしたでしょうね、おそらく。先生は、彼らの進んだ文化はこの人間関係を養分にして生みだされるのではないかと思われたんじゃないか。これが私の仮説です。

函館からベルリン号に乗船し、上海でワイルド・ローヴァーに乗り換え、ボストンに着くまで一年かかっている。その間には嵐もあっただろうし、危険な時もあったでしょう。昔はレーダーなんてありませんから、命がけの航海で、特に「悪魔の海」と言われた喜望峰は最大の難所です。その中で、「ユー」と呼び合う関係が危機を救ったことが何度となくあったのではないかと思うわけです。

そしてそれは、西欧の進んだ社会を生み出す力が、一人ひとりが創造的に仕事に取り組むことを許す人間関係を養分にしているのではないかと、先生は思われたのではないだろうか。そして船の上での人間関係がキリスト教からきていることを知って、先生はキリスト教に傾斜していったんじゃないか。「同志社大学設立の旨意」に「一国を維持するは決して二、三英雄の力に非ず。実に一国を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざる可からず」とありますが、その信念の核の芽生えみたいなものは、もうこの船の上で生れかけていたのではないか、というのが私の勝手な想像です。

そしてキリスト教です。初めは、日本を救うために、進んだ西欧の文化を作っている科学技術を学びたいと思って日本を脱出した。ところが、どうもその根幹にキリスト教という原理があるのではないかと、アメリカに上陸してからではなく、すでに船の上で、何となく感づかれたのではないか。だから武士の魂と言われる刀を売り払って、漢訳聖書を買ったりされたんじゃないか。新島研究の先生方には笑われるかもしれないけれど、わたしはそう思っているんです。

そうしますと、ラグビー部の森川君が上級生の馬場君に、あの土壇場の中で「馬場かわれ」と言えたことは、新島先生が船の上で体験したことと重なるんです、少なくともわたしの中では。新島先生が残された種子を岡先生がラグビー部に撒き、森川君が実らせた、そんなふうに思える。

その森川君の機転のおかげで同志社は僅差を守りきり、三年連続日本一に輝くことになったのですが、わたしは数日後、森川君にその日の出来事について聞いてみました。わたしが「あれは試合前から考えていたことなの？」と聞くと、「まさか」と森川君は答えました。「夢中で、ああなってしまったんです」と言うんですね。

「高校時代にもそんな体験はあったの？」「あるわけないでしょう。そんなこと言うと、上級生に半殺しにされますよ」。

「だったらあれは、同志社だからやれたということ？」「よう分りませんけど、練習中でも、下級生のぼくでも、びしびし意見が言えますから、試合でも自然とああなったんだと思います」と彼は言うんです。「半殺し」というのは、冗談だと思いますが、彼の出身高校だけではなくて全国の大学でも、体育会というのは大体において上下関係とか、決められたことに対して、極めて厳しいことは事実です。ですから、彼の柔軟性は同志社の中で目をさましたと言って間違いはないと思います。試合翌日のスポーツ新聞も、「同志社でしか起りえないこと」と述べていましたね。

同志社のいい遺伝子を

最初にお話しした元学長との話も、ラグビー部に起こった出来事も、わたしは同志社の体内に確実に流れているDNAだろうと思うのです。ここで誤解のないように言っておきますが、「自由」というのは、個人が「生まれながらに持っている」というようなものではないということです。個人の自由は、社会や共同体からそれを保障されることが不可欠だと思うのです。ということは自由を獲得するためには、それと引き換えに社会共同体の一員としての義務と責任を引き受けることが欠かせません。そういう関係的な概念なのだと思います。ルソーなどは、子どもは「完全な人間」ではない、だから教育が必要なんだって言っていますね。

わたしは元学長に抵抗したけれども、職員としての任務を懸命に果たした。その結果、同志社に迎え入れられた。またラグビー部の森川君も同志社の勝利のために懸命にがんばった。だからチームメートからその自由の行使が認められた。そういうことだろうと思うのです。「勝手気まま」と「自由」とは同じではない。

新島先生のすごいところは、明治新政府の強力な誘いを断って、田中不二麿に「キミはヤソの奴隷だ」と嫌みを言われても、その田中不二麿から英学校の設立に協力してもらえたように、先生はある意味では頑固な自由人でしたから、他人と表面的な同化はしないことも多かった人ですけれど、それでもそういう一度対立した他者といい関係を保っています。そこがすごいところです。私はそれは、先生が日本という国をいい国にしたいと一途に思い、そのために努力を惜しまないことが相手に伝わって、相手に認められたからだと思います。

たしかに同志社には、他の大学より自由があふれていますけれども、それは、やりっぱなしの自由ではない。自己責任というものも大いに要求しているのだということを理解してもらいたいと思います。

ちょっと前に、有名な大企業にいろいろな問題が生じ、その中で生き残れる可能性のある部門の社長に、非常に若い人物が抜擢されました。これが本学の卒業生でした。一年前も、日本有数の食品会社に不祥事がおきました。その後に社長に就任したのも、本学出身者でした。何年か前、これも日本を代表する百貨店が総会屋との黒い関係から経営陣の総退陣騒動があり、そのあとに就任した社長がこれも本学出身者でした。組織というものは、何かスキャンダラスなことが内部で起きると、それを修復するために清潔な人物、あるいは良心的な人物を待望するという性質があります。どうも同志社の卒業生は人を押しのけて進むような強引さには欠けるけれども、清廉潔白な人が多いと一般的に言われます。私が企業回りをしていても、そういう評価を聞きます。清潔な、あるいは良心的な人物が求められる時には、本学の出身者が抜擢されるというのも、何だか同志社のDNAかなという気もしますね。

今、世界は自由主義経済の時代ですが、内実は「拝金主義」が横行しています。そこには倫理の大いなる欠如が見られます。そのことは人類の未来に暗い陰を落とすことになりかねません。同志社で学ぶからには、倫理の大切さも是非、身につけていただきたいと念願しています。それもまた、同志社のDNAですから。

みなさんも、同志社の空気をたっぷりとすって、いい遺伝子を受け取っていただきたいと思います。

二〇〇五年十一月九日　同志社スピリット・ウィーク「講演」記録